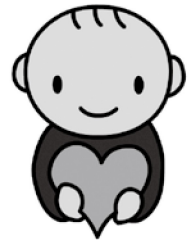


「JUNIORボーンション」



スクールサポーター  
(臨床心理士)  
小林 真理

なんのための診断？

「発達障がい」という言葉が注目を集め話題となつてから10年以上が経とうとしています。

発達障がいとは、「自閉スペクトラム症(以前の自閉症やアスペルガー症候群)、注意欠如/多動症(以前の注意欠陥/多動性障がい)、学習症(以前の学習障害)※などのことで、診断を受けるには小児精神科医のいる病院を受診する必要があります。ちなみに町から通える範囲で小児精神科医のいる病院の初診は平均で3ヶ月待ちという現状があります。

「それほどまでして診断を受ける必要があるのか」そう感じる方もいることでしょう。発達障がいの大きな特徴は「社会性の障がい」つまり、対人関係がうまくとれない、集団生活を送る上での暗黙のルールやマナーがわからない、場の雰囲気

気を読むことが難しい、などのハードルなのです。発達障がい

の中には、受診して診断を受けて薬を処方され、それを飲むことによつて日常生活を送る上での問題となつてきている状態が一部改善されたり、課題や作業に取り組みやすくなつて過こしやすくなる場合もあります。このハードルの高さや数は人それぞれですが、この「社会性」というハードルは薬でなんとかなるものではありません。

「社会性」に対しては、ソーシャル・スキル・トレーニング(以下: SST)と言われる練習が有効です。「自分で考えて行動しなさい」と言われることが苦手な彼らにとっては「教えてもらえばわかる」「説明・解説してくればできる」ことがたくさんあります。日常生活や対人関係における些細なことから大きなことまで伝えて練習を重ねることがSSTなのです。ですが、それと同時に発達障がいに対する周囲の理解も重要です。理解があればハードルを低くしたり、ハードルを避けるような工夫も可能になってくるからです。

SSTを継続したり、ハードルをなんとかする工夫(共生社会)や支援を受けるベイスになつてくるのが「診断」な

のです。

診断はレッテル貼りではなく、本人の役に立つためにあるものなのです。本人の助けにならないのであれば、診断は意味のないものになってしまします。特に子どもの場合には、園や学校での生活に加え、進学や就労といった大きなストレスとなる環境の変化があります。起こりうるハードルを事前に予測し、支援を行う(支援を継続する)と言つ意味では、診断を受けることには大きな意味があります。周りに理解や協力をお願いするにしても、診断があることでそのハードルを伝えられ理解を得やすくなり、環境を整える一つの手段としても有効です。診断は本人のメリットとなるもの、ということも多くの方が理解することによつて、必要のある子ども(家庭)にとつて受診のしやすさにつながつていくといえますね。そして「周りの人」となる私たちも発達障がいを身近なものとして理解し、ハードルをなんとかする一員になれたらいいですね。

※平成26年5月末に発表された、日本理化学工業会による病名の新しい指針にそつた表記です。

## 日本理化学工業 会長 大山泰弘 氏 講演会

知的障がい者に導かれた企業経営から 皆働社会実現への提言

軽井沢町  
人権講座

とき ▶ 7月9日(水) 15時から  
ところ ▶ 中央公民館 講義室

「働く」とは、人に必要とされ、人の役に立つこと。  
そのために一生懸命頑張れば、みんなに応援してもらえる。  
このことを知的障がい者に教えてもらったのです。

大山泰弘 著「働く幸せ」より



日本理化学工業は全従業員79人中58人が知的障がい者(内26人がIQ50以下の重度の障がい者)が働いている、学校で使うチョーク製造を主とした会社です。

このような障がい者の多数雇用を目指したのは、禅寺のお坊さんからのある言葉でした。

【問い合わせ】 生涯学習係 ☎45-8695